CUT IN 57
表現を発見する小劇場の新聞
experimental theater news

もっともっと新しい表現が…。 ALICE FESTIVAL
優れた小劇場演劇のショーケース、アリスフェスティバル

劇団態変　金満里ソロ「月下彷徨」
Riverbed Theatre
『The man who became a Cloud』
12月26日～30日　新宿タイニイアリス

「小劇場ならでは！」という野心的なプロダクションを毎年世界中から発掘紹介するアリスフェスティバル、2作品連続公演の一夜。

金満里については全く知識無いまま公演を見ることになった。身体障害者による舞踏公演！？　いったいどんなものなのだろう。不健全な同情を前提とするようなものはアリスフェスティバルにかかるはずがないとしても…障害を逆手に、身体の特殊性を強調する見世物のようなアプローチなのか、はたまた不可解、不条理な身体性にこだわった暗黒舞踏のカテゴリーからのアプローチか…実はかなり不安な気持ちで幕開きを迎えた。

床に寝そべって上半身を持ち上げるようにして始まったはじめのスキット。賛美歌のような音楽の中、受難の宗教者のような金のダンスが始まる。そばだてた髪の毛に刺さった茨のような草が彼女の上半身の動きを増幅する。眉の動きから指先まで、彼女の限られた運動機能のすべてを駆使した表現が彼女の身体構造と目論んでいる表現の方向を提示するようなプロローグ。容赦なく晒される“特殊な構造”の身体に正直言って、驚いてしまわないわけではなかったが、実は彼女の表現がストレートで素直なものであることがこのころには理解できた。

暗転のち衣装を黒い着物に変えた金の板付き。ベートーベンの月光から荒城の月へ。朗々たる旋律の中、彼女の動きと表情が何かの熱いエネルギーを描写していることが伝わってくる。打って変わって次の場面はヨーロッパモードのワルツ。そしてボギーハットの男装。そして肉襦袢にバッハ。一転して髪に花を飾り、肩を露出した赤いドレスでの官能的なバリダンス。そして最後は天上の音楽のようなアリアへ。ステージ後半の金の優しい表情が印象的だった。

観る前の私の予想は心地よく裏切られた。彼女の目指す表現は特殊な身体性に安易におもねるものではなく、暗黒舞踏が伝える身体の“不可解な部分”にこだわるのでもない。彼女の特殊な身体を超えて伝わってくる表現が、なんといってよいか、マージナルでない“王道”のものであることに感銘を受けた。たとえ肉襦袢で舞台を這い回っても、泥にまみえる方向ではなく、天に飛翔するような方向を目指している舞踏なのだ。障害ゆえの特権的肉体論だけで理解されるべき作品でも舞踏家でもないだろう。

Riverbed Theatreは、昨年のアリスフェスティバルでも、「CUT IN」編集人だった井上二郎と一緒に観た。静かなそして“シュールな絵画のような”演劇だった。あまりのストイックな構成に、観客が戸惑う様子も見て取れた。アフタートークが終わったアリスの階段を駆け上がるなり彼が「面白いねー」と仕切りに感心していたことを思い出す。

シカゴと台北というユニークな“2重国籍劇団”の今回の作品はシュールレアリスムの画家、ルネ・マグリットをテーマにしている。台北の大きな書店の依頼で、書店内に設けられたステージで画家のマグリットと彼の世界を紹介する目的で企画されたのだという。

壁にマグリットの作品と思われる静物画。手前に箱のようなテーブル。最初は東洋人女性二人による“サディスティックな食卓”のようなスキット。昨年の作品にもあったモチーフで、不自然な姿勢で口に注いだ液体が溢れ出て衣服を濡らす。やがて壁の絵がスクロールし魚の下半身が女性の裸体、海辺の風景に変わって行く。魚たちの合唱。背中を映す鏡。額縁のなかで何かを話し続ける小さな口。マグリットのようにも思える頭が空っぽの人形が読むごとに文字が消えて行く書物。くぐり抜けると大空にぬける窓…。

上…金満里　下…Riverbed Theatre　撮影／青木司（4点とも）

ごく単純な音階のピアノと少ない台詞で構成される静かな舞台はいつも不思議な余韻とある種の“違和感”を感じさせながら潜在意識に何か言葉にならない印象を残す。また台湾の少女たちと白人のおばさんというキャストも不思議なのだ。グローバル化とかボーダレスとか世界はひとつ！とかいうのではなく、どこか不安な予感を孕む“違和感”として感じられる川床劇団の“国際性”も面白いと思うのだ。

テレビドラマや吉本新喜劇みたいな構造の、台詞と所作のやりとりだけで簡単に“筋書き”が追えるようなものだけが演劇ではない。「こんな新しい表現があったのか！」と刮目させられるような企画を世界中から集めてくるこの小さな演劇祭には、ほんとうに感心しないではいられない、お得な2本立ての一夜だった。　（前嶋知明）

NEWS

die pratze M.S.A. collection 2007 開幕！

「die pratze Mentally Shocking Art Collection 2007」

1980年代後半から実験的、先駆的な舞台を応援しようと始まった不定期アートフェスティバル。今回はB・ブレヒトやH・ミュラーなどのドイツの前衛現代演劇vs現在の東京演劇シーン。今回はその前半のラインナップをご紹介する。

開催日程：2007年3月12日～5月5日
会場：神楽坂die pratze／麻布die pratze
～以下の会場は全て麻布die pratze～

■池の下『中国の不思議な役人』
3/17（土）～21（水・祝） …p4記事参照

■ひげ太夫『雲丈郭（うんじょうかく）』
3/23（金）＝19:30、24（土）26（月）＝14:30 & 19:30、25（土）＝15:30、27（火）＝19:00
◎今年、旗揚げ10年目の脅威の組み体操軍団。ひげを描いた「出し物師」達が、風から城まで体で表現！　コツをつかむと見えてくる、見えてくる！　今は昔、冬が3年も終らぬ国があった。人々は、「ある男が春と夏を封じ込めたせいだ」と噂する。その男こそ雲丈。近づくと消えてしまう「雲丈郭」という城に住むという。女帝は「雲丈の顔を剥いで来い！」と命令を出すが、その目はどこか悲しげで…。今回のひげ太夫、女役は大増量。男臭さは五割増し！　問＝090-3503-0108（ひげ太夫）
http://www.higedayu.com

■劇団アンゲルス（金沢）『マクベス 2007』
4/3（火）～4（水）全日19:30　＊3日アフタートーク有り
◎アンゲルスは、日本の“地域”に在って10年！　茶番だらけの道化たこの国で「きれいはきたない、きたないはきれい」の焦点を見定めてみるべくいまだ蠢いている。――“平和で美しい日本”に塗り込められた“マクベス”が、じわりと滲み出す。――H・ミュラー…今再び。問＝070-264-3078（劇団事務所）
http://www.angelus-t.com/

■マキガミックテアトリック　超歌唱オペラ『チャクルパ3「ウルルン、ソナタ」宇宙語の旅』
4/7（土）～9（月）全日19:30　8日＝3:30有り
＊7日アフタートーク有り
◎ヴォイスパフォーマンスとプライベートインスタレーション。エレクトリックな音響のリピートと詩人の言葉によって構成するマキガミックテアトリックの第5回公演。チャクルパ3「ウルルン、ソナタ」宇宙語の旅シュビッターズの詩「Ur　Sonata」が更なる針飛びを起こす昼下がりハノーファーから宇宙Ruuuuuuummmと旅する驚異の人間サウンドを抽出する。超歌唱オペラの神髄。声の音響で綴る一時間。問＝0465-63-0578
http://www.makigami.com/

■普通劇場『闇の光明』
4/24（火）～25（水）　4/24＝19:30、25＝15:00 & 19:30（開場は開演の30分前）
◎第1部では、売春宿のすぐそばで「性病セミナー」を開催して大儲けする起業家を描いた、劇作家ブレヒトの愉快な小品『闇の光明』を上演。第2部では、この上演をめぐってゲストを招いてディスカッションし、なんとこの第2部がそのまま「独立起業セミナー」になっている（?!）、いかがわしくも新しい「セミナー演劇」に挑戦します。社会的活動としての演劇を志向する劇団「普通劇場」の旗揚げ公演に、乞う御期待！　問＝070-6433-5492（制作・加古）
http://ordinary21.web.fc2.com/

カットイン Vol.57 2007年1月号　発行／タイニイアリス　ディ・プラッツ　アート・ネットワーク・ジャパン　編集／小笠原幸介　090-5391-0588　kousukeogasawara@mail.goo.ne.jp　DTP／ORANGE. OGA

役者たちのありのままの生が躍動する、未知の驚きにあふれた演劇作品。

パフォーマンスユニットくらっぷ『掟の門』
2006年10月25日～26日
新宿タイニイアリス

(c) 2006 Yumi Himesaki + Tanpopo-no-ye Foundation

奈良市でアートセンターを運営する「たんぽぽの家」を拠点に、2004年より活動する「パフォーマンスユニットくらっぷ」。俳優・演出家のもりながまこと氏が代表を務め、現在7歳から20歳までの6人の知的障害のあるメンバーが参加するこのユニークな劇団が昨年、東京で公演を行った。

『掟の門』はカフカの同名の短篇作品にヒントを得て制作された彼らのオリジナル作品。与えられた台本やセリフはなく、いくつかのルールのみに基づいて即興的なやりとりが繰り広げられる舞台は、時に「健常者」と呼ばれる人たちにとっては予想外だったり、理解しにくい思考順序であるために舞台は不思議な緊張感に満ち、たびたび飛び出す“迷セリフ”に笑いも絶えないものであったと言う。残念ながら私自身はその舞台を目にすることが出来なかったが、照明スタッフとして製作に携わった魚森理恵氏にこの公演の様子をレポートして頂くことができた。彼らが示した独特の世界は、どのようなものだったのだろうか。(CUT IN 小笠原)

＊

昨秋、ご縁があって、奈良のパフォーマンスユニットくらっぷ公演「掟の門」の照明デザインをさせて頂くことになり、メンバー6人と、もりながまこと氏との共同制作をご一緒致しました。

私自身、過去に知的障害のある人々と共同制作をした経験は一度もなく、どう接していいのかも分かりませんでした。しかも台本がないときた。これは仕事を始めて以来の難題かもしれない。半ば頭を抱えつつ稽古場に行くと、彼らは物語上のルールを厳密に守り、常にアイデアを発明し、シチュエーションを蓄積し、物語を展開していることに大変驚きました。

カフカの短編「掟の門」をモチーフに展開するこの作品は、掟の門を通ろうとする旅の男（もりなが氏）の前に、門番たち（6人のメンバー）が次々と現れ、旅の男の行く手を阻みます。男に門を通らせない方法はその都度様々です。門番たる彼らは、例えば、不思議な言葉を男に浴びせたり、小さな太鼓を男に叩かせて踊りだしたり、どこからか見つけてきた箱に男を押し込んでしまったり。彼ら6人は門番という役割を守りながら、常に思いがけないアイデアを提示します。そんな彼らを、演出家であり役者のもりなが氏が作品にまとめていくさまは、音楽のライブセッションを見ているかのようでした。

稽古場での私といえば、台本がないかわりに、彼らが生み出したアイデアや印象的な言葉のメモをとりながら、ひっくり返って笑ったり、彼らの奏でる緊張感に息を飲んだり。稽古場に行くたびに、自分の中にあった知的障害を持つ人々に対する固定観念は、急速に解凍されてゆきました。それはショックにも似た気持ちでした。

本番ではこのライブを視覚的に伝達するのが私の仕事だと思うと、今までに感じた事のないプレッシャーを感じました。彼らが持つ無尽蔵なエネルギーに対応するには、私もセッション能力を高め、沢山のアイデアを抱えて本番に挑まないと付いていけなくなってしまう。稽古場で生み出されたものと同じものが本番に再生される事はない。時には予想もつかないことが起こる。しかし、稽古場で積み重ねて来た日々が、劇場空間の緊張と、観客の視線を得てどのように変容し展開するのか、とても楽しみでした。

本番当日は、新幹線が遅れたためリハーサル時間が短く、ほとんどぶっつけ本番になったにもかかわらず、彼らは観客のまなざしを得て、さらに密度を増し、思いがけない舞台を見せてくれました。彼らは、健常者の社会が作り出した固定観念や戸惑いなんて知ったこっちゃなく、稽古場だろうがステージの上だろうが、常に全力投球で表現に向かい、常に更新し続けるのでした。彼らの作品を観れば、私が稽古場で感じたように固定観念やとまどいが解凍されてゆき、人間が表現に向かう純粋な欲求を、観客も目の当たりにすることが出来るだろうと確信しました。

彼らは舞台作品を発表するとき、「障害のある人々の作る芸術」として分類された（柔らかにかくまわれた）状態で発表をすることが多い様子ですが、健常者が作った社会の枠組みが彼らの存在を分類してきたために、限られた人々の目にしか触れる事がなかったのかと思うと残念でなりません。分類された内側と外側にいる人々がお互いの垣根を認識し、彼らの舞台表現が、演劇の世界の中で自然と語られ、批評され、分析されることを願います。ここから先、彼らが持ち前のエネルギーでその枠組みを飛び出し、多くの人に目の当たりにして貰えるように、微力ながら力添えできれば、と思っています。

（魚森理恵／照明デザイナー／京都・アトリエ劇研スタッフルーム所属）

日常を見直す

●1月某日、世田谷区生活情報センターにて『いのちを守るデザイン展』を観る。「命を守る」などと言うと、医療機器や、防災グッズなどのデザインを思い浮かべるが、意外にも会場で紹介されていたのは、ピクトグラムやサインなどのコミュニケーションデザインだった。例えば非常口を表すサイン、避難地域を示すサイン、薬の飲み方を表示するピクトグラム、運搬物の危険性を知らせるピクトグラムなど、私達の身の回りには危険を知らせるため、或いは安全を守るための情報デザインは多い。今回の展示ではそれらのデザインがどのように出来たのかを、詳しく説明してあった。その中でも特にデザイナーの太田幸夫氏が、自らデザインに関わった非常口のピクトグラムの創作過程について詳しくレクチャーしていたのが興味深かった。このようなサインはデザイナーがただ自分の感性によって勝手にデザインするのではなく、例えば火災の際の煙の中での視認性や、視覚心理学的な様々な要素を考慮して作られた造形であることがよく分かる。例えば今使われている非常口のサインには、扉に向かって走って行く人が描かれているが、その下の部分を枠で閉じず、開けているのは、その方がサインの中の人物が向こう側に出て行っているように見る人に認識されやすいからなのだという。

グラフィックデザインには広告のような華やかな分野の他にも、これらサインのデザイン等、地味ながら社会の切実な要求に応えて作り出される分野があるのは知っていたが、それがこれほどまでに理論的に、緻密に作り込まれているというのは驚きであった。私達が普段の暮らしで目にする、さまざまなサインの一つ一つにもデザイナーたちの情熱と知恵が傾けられ、生活の安全を守っているのである。また最近ではデザインという創作行為自体に注目が集まっているのも興味深い。このような展示を見ると、普段見慣れているサインが何かとても哲学的なものにも見えてくる。デザインの創作過程を見るということは、普段意識することの無い「日常」を意識的に見直すような行為、また、ものの見方を変えるような行為なのだと感じた。(小笠原幸介)

いのちを守るデザイン展

●本号で取り上げた金満里ソロ公演、パフォーマンスユニットくらっぷの公演は、一般に障害者と呼ばれる人たちの表現である。無論2つの作品は全く別物であって、そのようなくくりで2つを並べることは的外れであろう。たまたま揃った原稿がこのような組み合わせになったに過ぎない。だから、2つの記事も、他の記事と同様一つの作品のレビュー、レポートとして読んで頂ければ良いと考えている。障害者の作るアートが健常者のそれと比べて優れているとか、劣っているとか、両者にはこんな違いがあるのだ…ということをここで言いたいのではなく、一つの作品として観ること、評価することが必要なのではないかと考える。(CUT IN)

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース

誰もが「○○キャラ」を演じながら、生きる。私達の世代の青春をリアルに捉えた作品。

劇団きらら（from熊本）『いちじく純情』
1月13日（土）～14日（日）
新宿タイニイアリス

REVIEW

劇団きららはアリスフェスでは常連の劇団だが、私自身観るのははじめて。

傾きかけた葬儀屋で働く姉のもとに現れた弟。姉は居候している小説家志望の男との将来に、漠然と不安を覚えている。そんな中、葬儀屋に一人の女が現れ、自分の葬式を出す相談を持ちかけてくる…。自分の意志でなく葬儀屋を継いだ気の弱い主人、おネエキャラの先輩、少しお馬鹿さん（を演じている?）なギャル店員など、濃いキャラクターたちが入り交じり、話はトントンと小気味よく進んでいく。全員が舞台に出ずっぱりという点もライブ感があって良い。

観ていると、ああ、切ない青春のお話だなぁ、と思う。青春、といっても登場人物達の年齢は20代後半から30代にかけての設定だろうか。結婚やら、仕事の将来など、自分で自分の人生を決めていかなくてはならない、そんな時期に差し掛かった男女がそれぞれの道を見いだすという話なのだ。それを特に押し出している訳ではないのだが、私もちょうどそのくらいの年齢なので、ふっと共感してしまうような雰囲気が作品全体にただよっていた。登場するギャル店員とて、もう若くは無いのではないだろうか。難しい問題に直面すると思考停止してポッキーをかじり出す仕草が妙に可笑しく感じてしまった。いつまでも判断停止することが出来ないこと、若さに頼っていけないことは彼女も分かっているのだろう。その上でおつむの弱いギャルを演じている彼女は、実はとても賢いのかもしれない。

いっぽう、自分の葬式の話を持ちかけて来た女は「いましめ」キャラだ。自虐的に自分の髪の毛を引っ張って、自分を「いましめる」。これも自分への「いましめ」か、電話でお客の悩みを聞く相談員の仕事をしている彼女は、ついにそのストレスに体が耐えきれなくなってしまう。自分が幸せになってしまうのを「いましめ」ようとする彼女は、可笑しく描かれてはいるが、実際の我々の中にそのような部分が多少なりともあるのではないかと感じさせた。「キャラ」という言葉はこの作品のキーワードではないかと思う。私達は何らかのキャラを演じているのかもしれない。

さて、終盤にとても印象に残ったシーンがあった。元彼との復縁話が立ち上がり、普段は見せない気弱な部分を見せた姉が、弟に対して「チューしようか」と冗談まじりに言うのだ。私には兄弟はいないので、兄弟に対してこんな思いを抱く時があるのか、よく分からないが、これまでまったく見えていなかった二人の関係性がひょんな出来事からぱっと浮かび上がってきた気がして、はっとした。無論、そこからドロドロの近親相姦のストーリーになる訳は無く(!)、少し切ない余韻を残しながら、二人はそれぞれ別れて行くのであるが、その爽やかでさらっとした感情の描き方に非常に好感を持った。作演出の池田美樹氏は女性である。もう少し言ってみれば、こういう感覚を「女性ならでは」というのだろうか。

「今」の空気をしっかりと捉えながらも、楽しく、そして爽やかな後味を残す作品だ。　（小笠原幸介）

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場
DIE PRATZE より最新ニュース

独自の身体言語で上演される寺山作品。

■池の下　第17回公演　劇団10周年公演　寺山修司全作品上演計画
「中国の不思議な役人」
die pratze M.S.A. collection 2007参加作品
3月17日（土）～3月21日（水・祝）　@麻布ディプラッツ
☆前売¥2800　当日¥3500　☆問=080-3389-7967　03-3366-9299（FAX予約）　☆作=寺山修司　☆演出=長野和文　☆美術=朝倉摂
☆出演=井上美千代　いづみスミオ　渡辺健太郎　鬼頭理沙　青木五百厘　梅澤良太　他

Q—麻布die pratzeは今回で2回目ですね。
A—はい、昨年の11月に初めて使わせてもらいました。自由度と不自由度がちょうど良い塩梅の空間がいいですね。都市の劇場で、もともと劇場として作られた空間には何故か食指が動かないのですが、麻布die pratzeや新宿のタイニイ・アリスには劇のキャンバスとして惹かれるものがあります。逆に最も東京的な下北沢の劇場には惹かれない。「下北沢では芝居をしない」が池の下のモットーなんです。
Q—今回の「中国の不思議な役人」は何本目の寺山修司作品ですか?

A—再演を抜かしますと15本目になります。
Q—寺山修司全作品上演計画とありますが、あと何本くらいで全部上演することになりますか?
A—これは文献によっても違って、実際に寺山が書いた戯曲が何本あるかはまちまちなのですが、だいたい37本前後かと思います。まったく偶然ですがシェイクスピアと同じです。まあ、両方ともコラージュの天才ではありますが。
Q—今回の作品の特徴はなんですか?
A—寺山の「中国の不思議な役人」は、バルトークのオペラを原典にしています。少女の愛を得ない限りは死ぬことの出来ない中国の宦官の話ですが、今回はこの作品を、実際には起こらなかった革命劇という枠組みを設けて創っていこうかと考えています。
Q—池の下の芝居は、公演のたびにまったく異なった表現方法がとられますが、今回はどんな形での上演になりますか?
A—今回の劇の重要なファクターとして「影」という存在があります。「影」が様々な場面に登場してくる。身体的にいかにこの「影」をつくっていくかということが、今回の作品では求められます。

池の下では、昨年から身体の素形を発見していく作業を行っています。これは、過去の日本人にあったであろう身体表現を再発見するという実験で、最終的にはこれが、表現の場ではグローバルな身体言語になるのではないかと考えているわけです。「中国の不思議な役人」では、「影」を見せていくためにこの身体の素形を使います。今年の夏に利賀演出家コンクールで上演した「犬神」にも、この表現が取り入れられています。
Q—その「犬神」では、優秀演出家賞を受賞しましたが、どういった点が評価されたのでしょうか?
A—野外でしたので、利賀の自然をすべて舞台のなかに取り入れるような上演方法をとりました。星空の下、自然の空間に役者の身体を生けこむような感覚でつくりました。その方法が評価されたのだと思います。
Q—最後に、今後の池の下の予定をお願いします。
A—3月の「中国の不思議な役人」のあとは、夏に韓国公演がありまして、密陽演劇祭に参加して、ソウル公演も行う予定です。日本に帰ってからは名古屋、大阪の公演がありますが、東京での公演はしばらくないと思いますので、ぜひ今回見逃さないようにお願いします。

JOIN IN THE PICNIC
期待の公演情報

◆神楽坂die pratze
2/24（土）&2/25（日）
Water Color
『PATCHWORK　MONSTER』
問＝090-6106-7305
（コシヌマ）E-mail:
mail_watercoler@yahoo.co.jp　☆作・演出＝知良
◎ゴミ捨て場には様々な物が集まる　紙くず、秘密、孤児、モンスター、、、。僕もそんな物のひとつだった。これは、汚くて寂しいゴミ捨て場での愛しい数日間の物語。

◆麻布die pratze
2/23（金）～2/26（月）
dramatic theater RARA☆

『dramatic　theater　RARA☆Vol.5「Mist」』問＝080-5528-9093
☆作・演出＝吉川剛史　☆出演＝深津裕則　斎藤貴幸　川又麻衣子　安ヶ平京子　大浦孝明　本田さやか
◎RARA☆一年ぶりの時代モノ！　今回は大正時代。レトロ感むき出し、ダンスあり、アクションあり、そして涙あり。呪われた主人公と娘の親子愛。

芸術文化を支援、発信するNPO
アートネットワーク・ジャパンより
MONTHLY LETTER Vol.36

"アーティストの役割は「問いかけ」を行うこと—" レバノンからの問題作に注目。東京国際芸術祭2007

これまで日本で紹介されることのなかった中東地域の作品の招聘、地方で活躍する劇団の公演を東京で上演するリージョナルシアター・シリーズ等特色あるプログラムを通じて、日本の演劇界に問題提起を行ってきた「東京国際芸術祭」。昨年12月20日、にしすがも創造舎にて記者会見が開かれ、プログラム内容および上演スケジュールが発表された。また、東京国際芸術祭で世界初演の新作を発表するレバノンの鬼才、ラビア・ムルエが来日し、来日講演会を開催した。

■東京国際芸術祭2007

東京国際芸術祭2007は、2007年2月1日から3月30日までの2ヶ月間にわたって開催。海外および国内から、総計12公演を上演する。

2004年から続いていた中東シリーズは今回が最終回。東京国際芸術祭2004で初来日したレバノンの鬼才、ラビア・ムルエが、世界初演の新作を発表。またチュニジアからは、2005年に『ジュヌン—狂気』で日本の観客に感動を与えたファーデル・ジャイビが、新作『囚われの身体たち』(仮題)とともに再登場。

ウズベキスタンからは、中央アジア演劇界を牽引するイルホム劇場が『プーシキン原作「コーランに倣いて」』を、そしてアイルランドからは、国際的にも評価の高いドルイド・シアター・カンパニーが、アイルランド劇作家シングの傑作『西の国のプレイボーイ』を携えて初来日。

地域で活躍する劇団を東京に紹介するリージョナルシアター・シリーズは今年から「新」「リーディング公演部門」と「創作・育成プログラム部門」の2部門制となり、地域で活躍する各劇団の劇作家・演出家に、プロの劇作家または演出家が戯曲の創作段階からアドバイスを行い、より質の高い戯曲、公演を目指す。

またANJのレジデント・アーティストである倉迫康史、阿部初美、高山明、岡田利規がにしすがも創造舎で創作・上演を行うほか、国内の実力派および期待のアーティストが参加する。

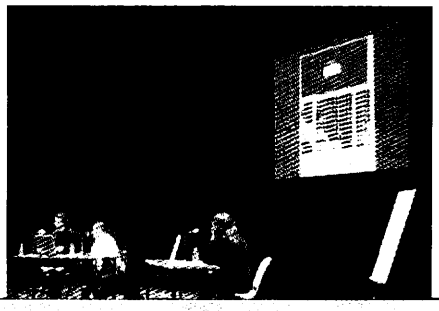
■ラビア・ムルエ来日講演会

12月20日、東京国際芸術祭2007で新作を発表するレバノンのアーティスト、ラビア・ムルエの講演会がにしすがも創造舎で行われた。

ラビアは現在、世界の演劇界・アート界で最も大きな注目を集める気鋭のアーティストの1人。彼の作品はヨーロッパの主要な劇場やフェスティバルのみならず、中東、北米、アジアの各地でも上演され、世界の演劇フェスティバルや劇場の常連としての地位を築いた。東京国際芸術祭2004で初来日し、『BIOKHRAPHIA—ビオハラフィア』を発表。挑発的でアイロニカルなこのパフォーマンスは、その高い批評性で話題を呼んだ。

メディアや共同体が語る真実と虚構の間のあいまいな境界に揺さぶりをかけるラビア。ベイルートのレバノン大学で演劇学を専攻した後、身体的・視覚的な表現を求めて映像作品やパフォーマンスをつくりはじめる。それらの作品は、内戦の終わったレバノン社会の傷と矛盾を舞台上で鋭く暴く。その過激なパフォーマンスに反し、ラビアは終始穏やかな物腰で「アーティストの役割はメッセージを伝えることではなく、問いかけを行うこと」と語った。

ラビア・ムルエ作・演出による世界初演の新作は、3月23日(金)から27日(火)まで、にしすがも創造舎特設劇場で公演。現在のレバノンを生きるアーティストは、どのような問いを私たちの前に置くのだろうか。



ラビア・ムルエ来日講演会
(C)松嶋浩平

■作品タイトル: 新作・世界初演(タイトル未定)
■作・演出: Rabih Mroue　ラビア・ムルエ
■公演日: 3月23日(金)〜3月27日(火)
■会場: にしすがも創造舎　特設劇場
■料金: (全席自由・日時指定・税込)
一般4,000円/学生2,000円(当日要学生証提示)

東京国際芸術祭2007
詳細… http://tif.anj.or.jp

主催: ANJ Arts Network Japan
共催: 社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター
事業共催: APA(芸術振興協会) JAPAN PROMOTION 国際交流基金
財団法人 地域創造
特別協賛: Asahi アサヒビール株式会社
協賛: SHISEIDO　トヨタ自動車株式会社　Panasonic
助成: Asahi アサヒビール芸術文化財団
後援: 外務省　東京都　社団法人日本劇団協議会
社団法人日本芸能実演家団体協議会　豊島区
協力: シアターガイド　シアター・テレビジョン
宣伝協力: 株式会社ポスターハリス・カンパニー

schedule for January 2006

TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光亜ビルB1 tel&fax 03-3354-7307
http://www.tinyalice.net　tokyo@tinyalice.ne.jp

2月8日(木)〜12日(月)■劇団バームクーヘン
変なパワーその3(完結編)「不透明な室温」
問=tel070-5083-1597　☆作=今村圭佑　☆演出=生駒英徳　☆出演=岡野康弘　扇田森也　宮嶋みほい　野上絢代(小指優)　珍竹(圧力団体イクチヲステガ)　横山旬(Plastic note)
錦織舞　◎2001年、演出の生駒英徳と作家の今村圭佑を中心に結成。これまでに9回の公演を行っている。
2月15日(木)〜2/18(日)■なすびプロデュース "なす我儘"
「それを言っちゃあお終いよ!〜幽霊の正体見たり枯れ尾花〜」
問=tel 03-5771-2077(WES)☆作・演出=浜津智明　☆出演 =なすび　野久保直樹　しんご　鈴木舞花　中川香果　田所二葉　川原澄人(劇団ガッツ)　本多可奈(BQMAP)　佐古真由美　◎振り返れば…重ねた公演回数も七回目。七転しても八倒しても、馬鹿は死なないなきゃ治らないとばかりに、劇場狭しと大暴れ!! 芸達者な俳優陣に恵まれ囲まれ…ハチャメチャ喜劇をお送ります所存に御座いますが、果たしてお気に召しますやら?!
2月19日(月)■TAICHI-KIKAKU
「金色の魚〜輪廻〜」 問=tel03-5385-9137　☆テーマ・演出:モリムラ ルミコ　☆出演=オオハシヨースケ　ヨシダ朝　モリムラルミコ　◎日本のパフォーマンスグループTAICHI-KIKAKYが生み出した世界(06年までに21カ国で公演)で通用する「言葉を越えた演劇」一身体詩一。東京はタイニイアリスで、ランダムに1年間にわたって公演する試みだ。
2月21日(水)〜2月25日(日)■桜会
「バラ戦争—人はなぜ殺しあうのか—」問=tel 03-3401-4403
☆原作=W・シェークスピア　☆プラン・台本=阿部良　☆演出=阿部良　☆出演=女麗仲樹　瀬川新一　真山達　武田光太郎、加藤雅也　小滝正大　高山賢吾　上村拓馬　三浦佑介　古坂るみ子　神保麻奈　泉沙池　住山絵美　井上洋美　八木梓　大島安紀斗　◎シェイクスピア作品独自の構成による台本で上演してきた阿部良が、「新シェークスピア」と銘打ち、上演致します。戦争に伴う数々の感情表現が見ものです。人はなぜころしあうのか。現代へのメッセージも折り込み、上演致します。
3月1日(木)〜3月4日(日)■タッタタ探検組合
「ハイパーおじいちゃん3」 問=tel 047-426-3379
☆作=牧島敦　☆演出=牧島敦　☆出演=谷口有　あおきけいこ　キクチマコト　栗原智幸　柴田O介　薬師寺淳一　桑名しのぶ　星野謙次郎　松嶋理史　牧島敦　◎タッタタ探検組合の人気シリーズ第3弾。幾度となく地球を救ったあのハイパーおじいちゃんが永遠の旅に出る。超高齢化社会型ヒーローアクション活劇、完結編!!

麻布 die pratze

〒106-0044 港区東麻布1-26-6-2F T&F 03-5545-1385

2月8日(木)〜11日(日)■soulstory
「鳥籠」 問=03-3713-6164(TOMO企画)
☆作・演出=戸沼智貴　☆振付=小村作真　☆出演=小村作真　長谷川真弓　花田麻由子　小椎尾久美子　執印徳枝　他　◎ピカソの『Minotauromachy』をもとにsoulstoryが贈るダンスストーリー。僕は「籠」の中…? それとも貴方が「籠」の中…?
2月16日(金)〜18日(日)■BOH! MIMISH
「笹川シネマ座物語」 問=03-3379-2670(BOH! MIMISH事務局)　☆作・演出=TAMURA　☆出演=五十里直子　長田弘次　斉藤祐樹　堀靖明　真木亜由美　瑠乃まひる　◎BOH! MIMISHの記念すべき第1弾は、とある田舎町の小さな映画館が舞台。笑いと涙のスペクタクルハートフルワンダフルコメディーになるかは乞う御期待。
2月23日(金)〜26日(月)■dramatic theater RARA☆
『dramatic theater RARA☆Vol.5 「Mist」』 問=080-5528-9093　☆作・演出=吉川剛史　☆出演=深津裕則　斎藤貴幸　川又麻衣子　安ヶ平京子　大浦孝明　本田さやか

神楽坂 die pratze

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

2月9日(金)〜12日(土)■UmpTemp
「豚の尻尾〜金色の血をもつ一族の物語〜」 問=080-1181-8365(制作部)　☆作=加藤京子　☆演出=長谷トオル　☆出演=朝田博之　菊地豪　篠木幸寿　谷修　蜂谷眞未　渡部愛　吉野翼　他　◎百年の時は語る　町と生きたヒトびとを　ジプシーは歌う　彼らに受け継がれしモノを　熱き風は運ぶ　始まり終わるコトを　私達は笑う　全ての物語の終焉を
2月13日(火)&14日(水)■中西レモン企画
『ちょっとした舞・踊の祭典　畳半畳vol.9』 問=tatami1.5@hotmail.co.jp　☆出演=相良ゆみ、中村公美、烏田紀子、石本華江、コグレアケミ、岩崎一恵、若尾伊佐子、大迫英明、原田広美、武藤容子　◎ダンサーの立つ舞台、その面積は何と畳半畳分。一日4組の出演者が夫々どのように対峙し、何を掘り当てるのか。今回だってみのがせないぜ!!
2月19日(月)&20日(火)■中西レモン企画
『ちょっとした舞・踊の祭典　畳半畳vol.9』 問=tatami1.5@hotmail.co.jp　☆出演=PANCHA、下田明正、椎名利恵子、りな・りっち、浅見裕子、川上暁子、ノシロナオコ、いとうみえ、幸内未帆、御之道似圭　◎ダンサーの立つ舞台、その面積は何と畳半畳分。一日4組の出演者が夫々どのように対峙し、何を掘り当てるのか。今回だってみのがせないぜ!!
2月24日(土)&25日(日)■Water Color
『PATCHWORK　MONSTER』 問=090-6106-7305(コシヌマ)　E-mail　mail_watercoler@yahoo.co.jp
☆作・演出=知良
2月26日(月)〜28日(水)■日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル(ニパフ)実行委員会(代表:霜田誠二)
「The 14th Nippon International Performance Art Festival (NIPAF '07) 第14回日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル—ニパフ07」 問=090-1652-9127　E-mail　nipaf@avis.ne.jp　☆出演=ラッケル・アロッホ(メキシコ、メリダ、女)　フランソアーズ・クールベ(フランス、パリ、男)　コウ・ジュウ(ミャンマー、ヤンゴン、男)　マー　ロン・マグバヌア(フィリピン、マニラ、男)　他　ペルー、イタリア、台湾など　海外12名を招聘。霜田誠二、黒田オサム他　◎これが世界のセンス、リアリティー! ニパフ07!　*出演者は毎日異なります。各10〜20分の作品。計2時間半程。途中入場可。

★★★★★★★die pratze M.S.A.collection★★★★★★★★
※前半のラインナップはp1参照。以下は4月以降のラインナップ。
〜麻布die pratze
4月27日(金)〜30日(月・祝)■ノイ企画
「ヴォイツェック/トラウマ」
☆出演/田崎哲也、林田一高、桝谷裕、亀田ヨウコ、他
☆作/ハイナー・ミュラー/ゲオルグ・ビュヒナー　☆構成・演出/中野志朗(文学座)　☆照明/川村栄緒　☆音響/増田翔平　☆映像/執行真生(Studio O' clock)
〜神楽坂die pratze
4月30日(月・祝)　■IT
「岩淵演出作品上映と朗読-<マハゴニー市の興亡>を中心に」
☆出演/富田正久、他　☆構成・演出/岩淵達治　☆制作/佐々木治己
5月2(水)〜3日(祝・木)　■M.M.S.T「HM」
☆出演/大崎美穂、伊藤恵、他　☆演出・照明・音響/百瀬友秀
5月5(祝・土)〜6日(日)　■稽古場の会(神奈川)
「深く鮮やかな闇〜プレヒト「処置」をめぐって」
☆出演/高木陽子、他　☆構成・演出/横山歩(神奈川芸術文化財団)

schedule for January 2006